

博士学位論文題目：中国語の概念メタファーに関する研究

— 認知メタファー理論の立場から —

氏名：韓 涛

所属：名古屋大学大学院国際言語文化研究科 国際多元文化専攻

提出年月：平成 26 年 3 月

論文内容の要旨

本論文は中国語の概念メタファー (conceptual metaphor) に関する理論的・実践的研究である。

従来、言語研究のパラダイムの中で言葉の形式や構造に関する問題が優先事項とみなされ、メタファーを含む比喩表現にかかわる問題は周辺の言語現象としてしばしば考察の対象から除外されてきた (山梨 1995 など参照)。しかし 1980 年代に Lakoff によって確立された認知意味論の中で比喩、とりわけメタファーは言語研究における中心的な位置づけを与えられている。90 年代に入り、中国でも認知メタファー理論が注目され、当該理論を紹介するものが多くみられるようになった (朱小安 1994 など参照)。ただこれらの中では単に理論の紹介にとどまるものが多く、英語のケースに基づいて確立された認知メタファー理論が中国語にも適用されるかどうかは不明であった。その後、Yu 1998 や藍純 2005 など中英対照の観点から中国語のメタファーを考察したものがみられるものの、中国語そのものを主な考察対象としたメタファー研究はほとんど本格的になされていないのが現状である。こうした状況に鑑み、本研究では認知メタファー理論の立場から、中国語のメタファーをどのように分析すればよいかという問題についていくつかのケーススタディーを提示するとともに、日中、さらに日中英対照研究を試みることを主な目的とし、認知メタファー理論への理論的・実践的貢献を目指した。

本研究は序章、終章を除いて、以下の 8 章からなる。

第1章 認知メタファー理論の基本的な考え方

中国における従来のメタファー研究では、メタファーを分析する際に“本体” (喩えられるもの)、“喩体” (喩えるもの) という修辞学で用いられている用語を採用している。

これに対して認知メタファー理論では「メタファーを概念的なものである」と位置づけたうえで、“本体”と“喩体”のかわりに「目標領域」と「起点領域」という用語を用いている。「起点領域」は相対的に具象性の高い概念領域とされ、「目標領域」は具象性の低い概念領域とされる。この定義に従えば、〈恋愛〉を〈旅〉の観点から捉える次の例 (1) において、

〈旅〉は「起点領域」、〈恋愛〉は「目標領域」にそれぞれ該当するといえる。

- (1) 所以，我对婚姻的定义是：婚姻就是那辆你开顺手的老破车，它伴随你走过了很长的旅途，随着时间的推移，它需要维护，修理，甚至有可能半道罢工。如果你一直坚持不换，其实到老了，它依旧可以陪伴你，只是功用不同。……

车要是半道罢工了，对你是个很大的问题。你是站在路边跟它耗着，还是搭个顺风车继续前行，等着它被拖回去，你一回家它又在那里等你？抑或我索性不要了，换辆新车开开，但不可能徒步到达目的地。多老，你都需要交通工具。

(六六《妄谈与疯话》 下線および日本語訳は引用者による)

[だから、私の婚姻に対する定義はこうだ：婚姻とはすなわちあなたが乗りこなしたボロ車である。あなたと共に長い旅をし、時間の推移に伴ってメンテナンスと修理が必要になり、道中で故障する可能性だってある。もしあなたがずっと買い替えをしようと思わないのなら、古くなってもそのボロ車は依然としてあなたのお供をすることができる。ただしその働きは異なる。…

道中で車が故障したら、あなたにとって大きな問題だ。あなたは道端に立って何もせずただ車と時間をつぶすか、それともヒッチハイクして旅を続け、車が家まで運ばれるのを待って、あなたが家に着いたときに、その車がまたそこであなたの帰りを待っていることにするか。或いは思い切って故障した車を乗り捨てて新車を運転することにしてみる。しかしあなたは徒歩では目的地に辿り着くことができない。なぜならどんなに老いても、あなたには乗り物が必要だからだ。]

メタファーを単なる表現レベルの問題とみなすのではなく、それをより抽象的な概念レベルに据えることにより、メタファーについて、例えば存在的対応関係と認知的対応関係の2つの観点からその内実を検討することや、メタファーのもつ様々な性質に関する理解を深めることができるといったメリットが考えられる。これに基づき、本研究では認知メタファー理論の立場を採用する。

第2章 概念メタファーの基盤

Lakoff and Johnson 1980 では共起性と類似性は、いずれもメタファーの基盤になりうるという見解を示している。共起性の具体例として〈上下〉のメタファー(例(2)参照)が挙げられ、類似性の具体例として《議論は戦争》のメタファー(例(3)参照)が挙げられる。

- (2) a. I'm feeling up. [私は気分が上々だ。]
b. I'm feeling down. [私は気持ちが沈んでいる。]
- (3) a. He attacked every weak point in my argument.
[彼は私の議論のあらゆる弱点を攻撃した。]
b. His criticisms were right on target.
[彼の批判は確実に的を射ていた。]

(例(2)(3)は Lakoff and Johnson 1980 下線および日本語訳は引用者による)

しかし Lakoff and Johnson 1980 以降対立する 2 つの立場が現れ、1 つは Grady 1997 などに代表されるメタファーの基盤として共起性しか認めないものであり、もう 1 つは鍋島 2002 などに代表される共起性を含む複数の基盤を認めるものである。

メタファーの基盤を共起性に集約する立場からは中国語における《怒りは火》と《怒りは気》の基盤について説明することができる。〈怒り〉という感情が生まれる際に、それに伴って「身体から熱が放出される」ことや「体内の圧力の増大」といった生理反応が観察され、前者は〈火〉のイメージを喚起し、後者は〈気〉のイメージを喚起するのにそれぞれ一役買っているといえる。しかし同様の立場から、中国語における《金銭や群集は水》と《善は白/悪は黒》のメタファー基盤については説明することができない。確かに、日常生活の中で「お風呂の中で金を数えること」や「群集が水の中で集まること」といった経験的共起性は可能性としてはありうる。しかしこうした経験は実際にはごくまれであり、メタファーの基盤としては不十分であるといえる。このように、上記の 2 つのメタファー基盤を解明するには、共起性以外の観点からアプローチする必要があると考えられる。

次の例 (4) (5) が示すように、中国語における《金銭や群集は水》のメタファーは、〈水〉を介して概念化される〈金銭〉と〈群集〉がいずれも〈複数の個体〉でなければならないという制約をもっている。

(4) ?? 几张票子流进了乡长的腰包。

[?? 数枚のお札が郷長の懐に流れ込んだ。]

(5) ?? 几个人浩浩荡荡，缓缓而行。

[?? 数人が雄大な川のように、ゆっくりと前を進んでいる。]

このとき「数枚」や「数人」といった表現が〈水〉がもっている〈大量性〉というイメージ・スキーマと衝突を起こすため、例 (4) (5) はいずれも不自然である。換言すれば、この〈大量性〉が目標領域である〈金銭や群集〉と起点領域である〈水〉を結ぶ基盤であると考えられる。そしてより重要なことは、この基盤は上でみた「事態 A を経験すると同時に事態 B をも経験する」という共起性基盤ではなく、構造的類似性によるもの(すなわち構造的基盤)であるという点である。

しかし共起性の基盤にせよ、構造的基盤にせよ、これらはいずれも中国語における《善は白/悪は黒》のメタファー基盤を説明するのに機能しない。中国語における〈白〉と〈黒〉は例えば“白客”[ホワイトハッカー]と“黑客”[ハッカー]の対立からわかるように、前者はプラスの評価性をもっており、後者はマイナスの評価性をもっている。そのため、同じプラスの評価をもつ〈善〉と〈白〉、同じマイナスの評価をもつ〈悪〉と〈黒〉を結ぶものは評価性であると考えた方が妥当である。

以上の議論からわかるように、メタファーの基盤を説明するのに少なくとも (i) 共起性、(ii) 構造的、(iii) 評価性の 3 つを設定する必要がある。この結果は前述の鍋島 2002 などの主張の妥当性を裏づけるものである。

第3章 概念メタファーのスコープ

第3章では「メタファーのスコープ」という概念に考察の焦点を当てながら、英語との比較を交えつつ、中国語の〈火〉を起点領域とするメタファーのスコープを中心に考察した。

次の例(6)が表すように、英語では〈火〉は感情領域のほかにも、〈議論〉などの〈状況〉を表す概念領域にも適用される。

(6) a. As a child I had real hot temper.

[子供にしては私は怒りっぽい性格だ。]

b. This problem has been hotly debated.

[この問題は白熱した議論が交わされている。]

(例(6)は Kövecses 2000a 下線および日本語訳は引用者による)

同様のことは中国語の場合についてもいえる。次の例(7a)は〈火〉が〈感情〉を表すのに用いられる具体例であり、例(7b)は〈火〉が〈状況〉を表すのに用いられる具体例である。

(7) a. 陈连的眼里迸出仇恨的火花，在黑黑的屋子里闪烁着它的光辉。 (CCL)

[陳連の目から憎しみの火花が飛び散って、真っ暗な部屋でその輝きをちらつかせている。]

b. 60年代，他结束了大学时代便投入了火热的生活。 (CCL)

[60年代、彼は大学を卒業してすぐに火のように熱い生活に身を投じた。]

《感情は火》や《状況は火》は、いずれも身体を基盤に得られる経験に基づくものであるといえる。このとき特定の感情や状況が生じる際に伴う体温の上昇と、基本レベルのカテゴリーに属する〈火〉のもつ〈熱〉という属性の間にある種の類似性を見出すことができる。そしてこの類似性は、英語のみならず中国語においても認められる。しかしその一方で、〈火〉のメタファーのスコープに関して、中英には一致しない側面もみられる。

(8) 今年他干起了花生米生意，做得还挺红火。 (CCL)

[今年彼がやり始めた落花生の商売はかなり繁盛している。]

例(8)は《良い状態は火の赤み》というメタファーを想定しているといえる。この場合、メタファーの目標領域は、「商売」が順調であることからわかるように、〈望ましい(ないしはプラスの評価性をもつ)状態〉である。中国では、例えば“开门红”[幸先よいスタートを切る]や“披红”[(光荣の象徴として)赤い絹を体にかける]といった表現が表しているように、赤色は通常ほかの色に比べて縁起がよいという考え方がある(林嵐娟 2005 など参照)。そのため、《良いことは赤》というメタファーが中国文化の中に根ざしており、これが人々の価値観(の一部)を構成しているといえる。しかし英語のような言語には〈火の赤み〉に同様の価値観がみられず、中国語と同様のメタファー写像は観察されることはなかった。

第4章 空間のメタファー

第4章では概念メタファーの根源性の1つの現れとして、中国語における〈空間〉のメタファーを取り上げた。具体的には「〈上下〉に代表される方向性をもつ〈空間〉」と「〈容器〉

に代表される境界線をもつ〈空間〉」の2つに分けて論じた。

〈上下〉のメタファーについては中国語の方向補語“～起来”と“～下(来/去)”の用法を例に議論した。次の例(9)が示すように、〈上〉を表す“～起来”が〈明〉のような“正向”[プラス]形容詞と共起しており、〈下〉を表す“～下(来/去)”が〈暗〉のような“負向”[マイナス]形容詞と共起している。

(9) 天一点一点地昏暗下去, 然后又一点一点地明亮起来。 (CCL)

[空が少しずつ暗くなり、それからまた少しずつ明るくなった。]

刘月华主编 1998 ではこの種の現象が指摘されているものの、なぜ“～起来”が“正向”[プラス]形容詞と共起し、“～下(来/去)”が“負向”[マイナス]形容詞と共起するのか、その動機づけについては言及されていない。

本章ではこの種の言語現象について、人間の身体経験(とりわけ知覚や運動感覚)、さらに文化・社会的要因に基盤を置く整列対応やメタファーによって動機づけられているものであることを主張した。“明亮起来”[明るくなる]、“昏暗下去”[暗くなる]を例に説明すると軽いものは通常上に位置し、重いものは下に位置する。このことから、概念レベルにおいて〈軽〉は〈上〉と、〈重〉は〈下〉とそれぞれ対応していることがわかる。一方、色彩感覚からいえば、明るい色は軽く感じるが、暗い色は重く感じる。このことから、〈明〉は〈軽〉と、〈暗〉は〈重〉とそれぞれ対応していることが理解できる。つまり、〈明暗〉(軽重)と〈上下〉は以下のような整列対応を形成していると考えられる。

垂直方向	明るさ	重さ
上	明	軽
下	暗	重

【図1】 〈上下〉と〈明暗〉(軽重)の整列対応

上の説明から、この種の整列対応は恣意的に配列されているのではなく、強い動機づけを有していることがわかる。

〈容器〉のメタファーをめぐる代表例の1つとして中国語における《身体部位は抽象物を入れる容器》を中心に検討した。次の例(10)～(13)が示すように、中国語では〈身体部位〉が容器化されたとき、〈感情〉〈考え〉〈言葉〉〈記憶〉といった抽象的概念がその〈内容物〉として理解されうる。

(10) 那天晚上, 我心里憋着的怒火终于爆发了 (CCL)

[あの日の夜、私は心の中にずっとおさえていた怒りがついに爆発した]

(11) 这个念头在他心里已经埋了很久了。 (CCL)

[この考えはずっと彼の心の中に埋まっている。]

(12) 他谨慎地把话咽回肚子里。 (CCL)

[彼は慎重に言葉を(腹に)飲み込んだ]

(13) 童年痛苦的记忆深深地埋在她的心底。(CCL)

[子供時代の辛い思いは彼女の心の底に深く埋められている。]

そして注意すべきは、我々がもっている〈容器〉－〈内容物〉に関する様々な推論も、これらの抽象的概念を理解する際に適用される点である。例えば例(10)が示すように、〈心〉という容器は内部の〈怒り〉の増大により圧力が増し、それが一定のレベルを越えると「爆発」することが可能である。つまり、〈心〉が〈容器〉として、〈怒り〉が〈内容物〉としてそれぞれ概念化される際に、〈容器〉－〈内容物〉に関する推論も保持されたままメタファー写像とともに起点領域から目標領域へ投射されると考えられる。〈感情〉や〈考え〉などの抽象的概念に関する豊かな理解が可能であるのは、この種の推論によるものであると思われる。

第5章 感情のメタファー

第5章では中国語の〈感情〉の概念化に焦点を当てて、メタファーが概念形成にいかに関与しているかについて考察した。

中国語話者がもっている〈名誉・不名誉〉という〈感情〉に関する理解は、主に〈顔〉という概念に基づいている(例：“丢脸”[恥をかく]、“脸皮厚”[ずうずうしい])。第5章では〈顔〉がどういった概念を介してメタファー的に理解されるかを手がかりに、中国語の〈名誉・不名誉〉のメタファー体系を、①〈容器〉のメタファー(例(14a)参照)、②〈所有物〉のメタファー(例(14b)参照)、③〈事象構造〉のメタファー(例(14c)参照)、④〈評価性〉のメタファー(例(14d)参照)の4つに分類した。

(14) a. 厚着脸皮蹭饭吃[厚かましく(←顔の皮を厚くして)飯をたかる]

b. 找回脸面[面目を取り戻す]

c. 面子上过不去[顔が丸つぶれ(←メンツの上を通れない)]

d. 脸上好看[面目が施される]

例えば〈顔〉が〈容器〉として概念化される際に、〈名誉・不名誉〉はさらに〈容器〉－〈内容物〉の性質に基づいて理解されうる。例(14a)の表す意味を的確に把握するには、我々がもっている「容器が厚ければ厚いほど中の内容物の熱が外に伝わりにくい」という〈容器〉－〈内容物〉に関する知識が必要不可欠である。

一方、〈名誉・不名誉〉に比べ〈恋愛〉という感情の概念化はより複雑なもので、そこには複数のサブメタファーが存在している。

(15) a. 亲爱的，我爱你的热度已达到一百二十度了。(CCL)

[ねえ、私の君に対する愛はもう百二十度に達したよ。]

b. 我们的爱情突然降温了。(CCL)

[私たちの間の愛は急に冷めてしまった(←温度が下がった)。]

例(15)は《恋愛は熱》のメタファー表現である。そして例(15)にみられるように、我々は〈温度の高いもの〉に関する様々な百科事典的知識、例えば「百度を超えれば液体が沸騰

する」(例(15a)参照)や、「温度は常に恒温であるとは限らず、上がったたり下がったりする」(例(15b)参照)を用いて〈恋愛〉について推論することができる。

- (16) a. 我不想用计谋追女生 (CCL)
[私は策略を用いて女の子を追いかけたくない]
b. 这是你爱情攻势中最重要的一步 (CCL)
[これが恋の攻勢の中で最も重要な一歩である]
c. 这类男人通常会把女人当成战利品。(CCL)
[このタイプの男は通常女を戦利品と見なす]

例(16)は《恋愛は戦争》のメタファー表現である。ここから〈恋愛〉も〈戦争〉と同様、両陣営が策略を用いて相手の陣地を攻め、勝利した側が「戦利品」を獲得することができるといったことが読み取れる。

第6章 思考のメタファー

第6章では中国語における〈思考〉のメタファーを取り上げて分析した。〈思考〉という概念は第5章でみた〈感情〉と同様、抽象的概念であると考えられる。しかし〈感情〉は、例えば〈名誉・不名誉〉や〈恋愛〉が生じる際に、それに伴って特定の生理反応が観察できるのに対し、同様のことが〈思考〉という概念には認められない。そのため、〈思考〉という概念は、〈感情〉よりさらに抽象化がすすんでいるといえる。第6章ではこの抽象的概念について、具体的に中国語話者が〈思考〉について語る際にどのようなメタファーを用いるかという問題について検討した。

中国語における〈思考〉のメタファーは、大きく(I)〈もの〉のメタファー、(II)〈身体行為〉のメタファーに分類できる。〈もの〉のメタファーの存在は〈思考〉が抽象的概念であるため、これを理解するには、まず空間上において一定の輪郭をもった存在として概念化する必要があるという理由によるものであると考えられる。このような観点から中国語における〈思考〉のメタファーは複数のサブメタファーによって構成されているといえる。筆者が用いたコーパスからは主に、①《考えの性質は物理的なものの性質》(例(17a)参照)、②《考えは力》(例(17b)参照)、③《考えは植物》(例(17c)参照)、④《考えは食べもの》(例(17d))、⑤《考えは液体》(例(17e))、⑥《考えは火》(例(17f))の6つが観察された。

- (17) a. 思想深刻 [考えが深い]
b. 被错误的念头束缚 [誤った考えに束縛される]
c. 成熟的想法 [成熟した考え]
d. 诱人的想法 [人を引き付ける考え]
e. 一股念头涌上脑际 [アイディアが頭に浮かんだ]
f. 点燃思想之火 [思想の火を燃やす]

これに対して、〈身体行為〉のメタファーについては Lakoff and Johnson 1999 で提案され

ている枠組みにおいて分析した。次の例(18)は、中国語における《考えることは知覚すること》のメタファー表現の一部である。

- (18) a. 他听出来了这话里有话。 (CCL)
[彼はその話には含みがあると(聞いて)分かった。]
- b. 只要屋里有一点烟味, 我就会闻出来的。 (CCL)
[部屋に少しでもタバコの臭いがあれば、私は(嗅いで)すぐ分かると思う。]
- c. 让他尝尝我的厉害 (『中日辞典』第2版小学館)
[あいつをひどいめにあわせてやる]

先行研究では〈視覚〉のケースが論じられているものの、それ以外の〈聴覚〉や〈嗅覚〉は検討されていない。しかし上の例(18)からわかるように〈視覚〉のみならず、〈聴覚〉〈嗅覚〉や〈味覚〉も〈考えること〉を表すのに用いられうる。

また、中国語における〈思考〉のメタファー体系を構成する(I)《考えは物理的なもの》と(II)《考えることは身体行為》の間には、次のような関連性が見出せる。例えば我々が〈食べる〉という身体行為を通して〈考えること〉を理解する際、〈考え〉が〈食べもの〉であることがすでに含意されている。同様に、〈動く行為〉には〈考えは動くもの〉、〈対象物を操作する行為〉には〈考えは個体〉、〈知覚行為〉には〈考えは知覚できるもの〉であることがそれぞれ含意されている。一方、(I)の中には、(II)から独立して存在するものもみられる。例えば〈考え〉をある種の〈もの〉—〈植物〉もしくは〈火〉として捉える際には、必ずしも人間のもつ身体行為が問題になっているわけではない。

第7章 コミュニケーションのメタファー— 日中英対照の観点から —

第7章では日英との比較を通して、中国語における〈コミュニケーション〉のメタファーについて考察した。

- (19) Try to pack more thoughts into fewer words. (Reddy 1979 日本語訳は引用者による)
[より多くの考えをより少ない語(に詰めて)で表現してみなさい。]

- (20) 罵声を浴びせる。(野村 2002)

例(19)にみられるように、英語では〈言葉〉は〈個体〉として概念化され、話し手(ないし書き手)と聞き手(ないし読み手)におけるコミュニケーションは〈個体化〉された〈言葉〉のやりとり、具体的にいうと〈意味〉を〈言葉〉に入れた後、〈導管〉を通して相手に送ることを通して行われているのに対して、例(20)が示すように、日本語では〈言葉〉は〈液体〉として概念化され、〈コミュニケーション〉は液体表現に基づいて理解されている。

本章では中国語話者がもっている〈コミュニケーション〉に関する通俗的な理解は英語または日本語のいずれとも一致せず、中国語独自のものであると主張した。それはすなわち、〈話し手と聞き手の間で行われる言葉のやりとり〉が〈内容物化された言葉がある容器から別の容器への移動〉を通して通俗的に理解されるというものである。具体的にいえば、①〈言葉を発することは内容物を容器から出すこと〉(例(21)参照)、②〈言葉を受け入れることは

内容物を容器に入れること) (例 (22) 参照)、③〈言葉は物理的なもの〉(例 (23) 参照) という3つのサブメタファーに基づいて、中国語の〈コミュニケーション〉が理解される。

- (21) a. 从嘴里说出来 [口から出る]
- b. 憋在肚子里 [腹におさめる]
- (22) a. 传到耳朵里 [耳に入る]
- b. 堵住耳朵 [耳を塞ぐ]
- (23) a. 涌了上来 [湧き上がる]
- b. 一串话 [ひとつつながりの言葉]
- c. 掏出来 [(手を突っ込んで) 取り出す]

ここからわかるように、中国語における〈コミュニケーション〉の概念化には〈容器〉のメタファーが大きくかかわっている。〈容器〉のメタファーが〈コミュニケーション〉の概念化にかかわっているという点は日英についてもいえることではあるが、中国語や日本語では〈コミュニケーション〉の概念化に積極的に関与しているのが《身体部位は容器》《言葉は内容物》というタイプの〈容器〉メタファーであるのに対し、英語ではそれが《言葉は容器》《意味は内容物》という別種の〈容器〉メタファーであるという点で異なっている。また、日中両言語に関していえば、〈話し手〉と〈聞き手〉の間でやりとりされる〈言葉〉が《身体部位は容器》というメタファーから独立して〈流動体〉として概念化されうるという点においては、中国語のそれとは大きく異なる。その要因として《身体部位は容器》というメタファーが日本語以上に、中国語に根ざしており、概念形成に積極的に関与しているという点が挙げられる。さらに、この結果は「類別詞をもつ言語において名詞概念が〈連続体〉的に捉えられているならば、それらの言語において抽象概念を比喩化するのに〈連続体〉(典型的には〈液体〉)を用いたメタファーが好まれる」(野村 2002: 55) という言語類型論的な仮説を直接支持するものではなかった。そのため、問題の仮説はさらに検討する余地があるように思われる。

第8章 言葉は流動体のメタファー — 日中対照の観点から —

第8章では日中対照の観点から、《言葉は流動体》というメタファーを取り上げて議論した。具体的には Nomura 1996 では日本語の《言葉は流動体》のメタファーを考察する際に提案されている4つのサブメタファー、(i) 言葉の産出は流動体を発すること、(ii) 言葉の流暢さは流動体の流れの速度、(iii) 言葉の理解のしやすさは流動体の透明度、(iv) 言葉を受け入れることは流動体を受け入れること、以上4つを分析の枠組みとして考察した。

〈言葉の産出〉に関しては、日本語では通俗的に〈流動体を発すること〉を通して、中国語では一般的に〈複数個体を(容器から)出すこと〉を通してそれぞれ理解される(例 (24)

(25) 参照)。

- (24) a. 水を浴びせる
- b. 言葉を浴びせる

- c. 高橋尚子選手は、小出義雄監督から、それこそシャワーのごとく「いいねえ、Qちゃん」の言葉を浴びせられたという。(KOTONOHA)

(25) a. 泼水 [水をぶっかける]

b. *泼话

c. 说一堆话 [言葉を浴びせる (←大量に言う)]

〈言葉の流暢さ〉に関しては、〈流暢な言葉の産出〉が〈さらさらと流れること〉を通してメタファー化されうるという点において日中両言語は軌を一にしているものの、〈滞る言葉の産出〉の〈流れの悪さ〉の観点からのメタファー化は日本語のみにみられ、中国語においてその存在を確認することができない。

〈言葉の理解のしやすさ〉に関しては、日本語に存在する「言葉を濁す」といった表現が当該サブメタファーのメタファー表現に該当する。一方、「言葉を濁す」に対応する中国語の“支吾其词” [言葉がはっきりしない] や“含糊其词” [言葉が曖昧である] はいずれも液体表現ではない。このとき、“兜圈子” [ぐるぐる回る] や“拐弯抹角” [曲がりくねった道を歩く] が示しているように、〈言葉の理解のしやすさ〉 (ここでは〈言葉の理解しにくいこと〉) は、中国語において〈移動〉、具体的にいえばその典型例である〈旅〉 (traveling) という起点領域を通してメタファー的に理解されていると考えられる。

最後に〈言葉の受け入れ〉に関しては、「言葉を汲む」や「辛辣な言葉を浴びる」が示すように、日本語では〈言葉の受け入れ〉は〈流動体の受け入れ〉である。これに対して、“理解寓意” [寓意を理解する] や“受到指责” [批判を受ける] からわかるように、日本語の「汲む」と「浴びる」に対応する中国語表現はそれぞれ「理解する」と「受ける」であり、いずれも〈流動体〉のメタファー表現ではないといえる。

以上の分析結果からわかるように、日本語とは対照的に、この4つのサブメタファーは中国語において首尾一貫してみられなかった。従って日本語のように、この4つのサブメタファーが中国語において1つの通俗的な理解を構成しているとはいえない。そのかわりに中国語では〈言葉〉を概念化する際に〈流動体〉のメタファーより、〈容器〉のメタファーが積極的に関与していることが検証され、この結果は第7章で導いた結論と一致するものである。まとめると〈言葉〉が〈流動体〉という抽象度の低いレベルで概念化される日本語に対して、中国語では〈言葉〉が〈容器〉—〈内容物〉というより抽象的なレベルで概念化されているといえる。

認知科学における重要な発見の1つとして「抽象概念の大部分はメタファーに基づいて理解される」というのがある。本論文では中国語のメタファーに関する分析を通してこの主張の妥当性をさらに裏づけた。これは、本論文で取り上げた中国語の具体例の大部分が詩歌など特殊な分野で用いられる特殊な表現ではなく、日常生活で使用されるごく一般的な言語表現であるにもかかわらず、程度の差こそみられるものの、いずれもメタファーの色合いを帯びているというところからも窺える。

主要参考文献

- 藍純 2005. 《认知语言学与隐喻研究》，外语教学与研究出版社。
- 刘月华主编 1998. 《趋向补语通释》，北京语言文化大学出版社。
- 朱小安 1994. 〈试论隐喻概念〉，《解放军外语学院学报》第 3 期，12-18 页。
- 鍋島弘治朗 2002. 「メタファーと意味の構造的性：プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から」、山梨正明他（編）『認知言語学論考』第 2 卷、ひつじ書房、pp.25-110。
- 鍋島弘治朗 2003d. 「言語学的アラインメント試論—写像（mapping）の骨格としての整列（alignment）—」、『英文学論集』（関西大学英文学会）第 43 号、pp.79-109。
- 鍋島弘治朗 2007. 「領域をつなぐものとしての価値的類似性」、楠見孝（編著）『メタファー研究の最前線』、ひつじ書房、pp.179-200。
- 鍋島弘治朗 2011. 『日本語のメタファー』、くろしお出版。
- 野村益寛 2002. 「〈液体〉としての言葉：日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐる」、大堀壽夫（編）『認知言語学 II：カテゴリー化』、東京大学出版会、pp.37-57。
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』、ひつじ書房。
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』、くろしお出版。
- 林嵐娟 2005. 「日本人と中国人の色彩感覚」、『都市のフィクションと現実』大阪市立大学大学院文学研究科 COE 国際シンポジウム報告書、pp.5-11。
- Grady, Joe. 1997. THEORIES ARE BUILDINGS revisited. *Cognitive Linguistics* 8(4), 267-290.
- Grady, Joe. 1999. A typology of motivation for conceptual metaphor: correlation vs. resemblance. In Gibbs, R. and G. Steen(eds.), *Metaphor in cognitive linguistics*, 79-100. Philadelphia: John Benjamins.
- Kövecses, Zoltán. 2000a. The scope of metaphor, In Antonio Barcelona (ed.), *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*, 79-92. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Kövecses, Zoltán. 2000b. The Concept of Anger: Universal or Culture Specific? *Psychopathology* 33: 159-170.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the flesh*. New York: Basic Books.
- Nomura, Masuhiro. 1996. The Ubiquity of the Fluid Metaphor in Japanese: A Case Study, *Poetica* (46), 41-75.
- Reddy, M, J, 1979. The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about language, A.Ortony (ed.), *Metaphor and Thought*, 284—324. Cambridge University Press.
- Yu, N. 1998. *The Contemporary Theory of Metaphor: A Perspective from Chinese*. Amsterdam: John Benjamins.
- 中国語用例出典：北京大学中国語学研究中心（CCL）語料庫